九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『満鮮日報』と朝鮮語モダニズム詩 : 李琇馨の詩を中心に

金, 晶晶
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1551322

出版情報：九大日文. 25, pp.70-80, 2015-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『満鮮日報』と朝鮮語モダニズム詩

――李琇馨の詩を中心に――

金晶晶（キンショウショウ）

一、はじめに

これまで『満鮮日報』における朝鮮語文学作品は、韓国や中国・朝鮮民族の研究者の間で多く研究されてきた。その主要な研究成果として、呉養鎬（オヤンホ）の『韓国文学斗 間島』[1]および『日帝強占期 満洲朝鮮人文学研究』[2]、蔡壎（チェフン）の『日帝強占期 在満韓国文学研究』[3]、金虎雄（キムホウン）の『在満朝鮮人文学研究』[4]、金長善（キムチャンソン）の『満洲文学研究』[5]、張春植（ジャンチュンシク）の『日帝強占期 朝鮮族移民作家研究』[6]などの研究著書や大村益夫・李相範（イサンボム）共編の『『満鮮日報』文学関係記事索引』[7]、カン・デミンらによる『満鮮日報 朝鮮人団体個人 関連記事目録集』[8]などの記事索引が挙げられる。それら先行研究によると、一九九〇年代の韓国における朝鮮語文学研究の出発点は、「満洲」の朝鮮人文学を韓国あるいは中国いずれの国の文学と見なすべきかということから始められることが多かった。つまり韓国人研究者は、韓国が日本によって植民地統治を受け、一九三〇年代末から終戦まで言論を厳しく制限された時期を韓国文学における空白の期間とみなし、その空白を埋めてくれる材料を「満洲」の朝鮮人文学に求めたのである。「亡命文学」（李 明 宰（イミョンジェ））、「移民文学」（呉養鎬（オヤンホ））、「在満韓国文学」（蔡壎（チェフン））など、さまざまな呼び方が生まれたのもそういった考えに基づいた、研究の流れによるものであった。一方、中国における八、九〇年代の研究動向は、「反日傾向が比較的はっきりした作家または作品に対する研究はおおよそ活発に展開された反面、作家の政治性向と文学活動乃至作品の主題が曖昧模糊であるものまたは、親日傾向がみられる作家作品に関する研究はほとんど避けられていた状況である。」[9]と金長善（キムチャンソン）が述べている通りである。そのため、その時期の先行研究では研究対象とする作家や作品が偏りがちであった。しかし二〇〇〇年代に入ってからは、満洲における著名な朝鮮人作者とその作品を中心に論じる研究がある一方で、中国語やロシア語などで書かれた文学作品との比較考察が行われたり、これまであまり研究で注目されることのなかった、詩人や作家も研究対象として積極的に扱われつつある。

筆者が本論文で取りあげる、在満朝鮮人によって詠まれたモダニズム詩は、朝鮮語文学の特異な形態の一つとして先行研究において度々言及はされて来たが、詩の内容に関しては、「叙情詩の一般的な読解法では理解しがたい。文脈が非論理的で内包している内容が複雑であるからである。」[10]という意見や、「このような異質な単語やイメージを無理矢理連結させて何を言わんとしているのだろうか？（中略）総じてこのような無責任な

詩的発想は、世界と自我との対決を諦めた、軟弱な詩人の自己防御のための身を隠す術に他ならない。」[11]といった指摘からもわかるように、彼らのモダニズム詩は当時の政治的時局や体制から目を背けるような消極的な態度の表れだとして、九〇年代の先行研究では否定的な見方がなされることが多かった。そして二〇〇〇年代に入ってから、金長善（キムチャンソン）、張春植（ジャンチュンシク）などの研究者が研究書の中で、『満鮮日報』におけるモダニズム詩作品をいくつか取り上げて、積極的にその意味の解釈を試み、モダニズム詩が「満洲」における朝鮮人詩人の間で奇妙な流行現象を見せたことについても肯定的な見方を示しているが、まだその考察は一部分にとどまるもので十分とは言えない。そこで本稿では、先述のような先行研究の流れと蓄積をふまえながら、朝鮮人のモダニズム詩の内容にさらに踏み込んで考えるとともに、それらの詩が『満鮮日報』の文芸欄に継続的に登場したことの意味を『満鮮日報』というメディアの特性とともに考察したい。

二、『満鮮日報』略歴とそのメディア的特性

一九三三年八月二五日、日本の国策により『間島日報』[12]に次いで、『満鮮日報』の前身である『満蒙日報』が「満洲国」の「首都」であった新京で創刊された。そして一九三六年一一月に、『間島日報』は『満蒙日報』によって買収・統合され、『満蒙日報』は「満洲国」唯一の朝鮮語新聞として残ることになった。このような新聞の買収と統合が進められた背景には、満洲地域のメディアを牛耳っていた「満洲弘報協会」の存在があった。満州事変をきっかけに一気に日本と中国との緊張関係が高まると、日本の軍部は政府部内の主導権獲得に本腰を入れ、言論統制についても従来の消極的統制とは異なる積極的統制の立場を主張するようになる。そこで一九三六年、満洲における通信社と新聞社を全て包括する新しい組織として「満洲弘報協会」が設立され、関東軍司令官直属組織である「弘報委員会」がその上部に位置し、メディアを把握指導することになった。それ以降「満州弘報協会」の力により、「満洲」では強力な新聞統合が進められていったが[13]、その具体的な内容については、里見脩の文章から引用する。

> この統制案（「在満輿論指導機関ノ機構統制案」、筆者注）の特徴は、満洲の主要な新聞、通信社で構成する「弘報協会」を新たに設立し、それを関東軍、満洲国らで構成する間島軍指令官直属組織「弘報委員会」が把握指導し、言論統制の徹底化を意図したことにある。つまり軍は上部に位置して、メディア自身に自らの統制を行わせるという形態だ。（中略）また満鉄の資本系列下にあった満洲日日新聞、大新京新聞、哈爾浜日日新聞（以上邦字紙）、大同新聞、盛京時報（以上、華字紙）、満蒙日報（諺字紙）、マンチュリャ・デーリー・ニュース（英字紙）の邦字、華字、諺字、英字の主要新聞七紙は表向きには独立した個々の会社経営を維持した

ものの、資本的には弘報協会に統合され、弘報協会がそれら新聞の幹部人事を含め実権を掌握した。つまり、「弘報協会が国通を直営（通信部）し、同時に加盟各新聞社の全株若しくは過半数を所有し、資本的に完全に統制下に置いた」という運営形態が採られた。弘報協会の設立資金は、満州国政府が国通を、満鉄が新聞各社を現物出資（計一七五万円相当）さらに満州電電が二五万円を出資して、同年九月に弘報協会は「資本金二百万円の株式会社」として発足した。(14)

このような新聞統合の流れの中から朝鮮語新聞であった『満蒙日報』は、日本の国策に順応するという前提の下で生き残ったのである。そして一九三七年一〇月、出版社社長に李容碩（イヨンソク）が新しく就任してから新聞の名前は『満鮮日報』に変わり、朝刊八面が発行されるようになった。発行地は『満蒙日報』と同じく新京であり、発行部数は二万部であった(15)と言われている。一九三八年末には日本政府から年六四〇〇〇円の補助を受け、紙面が一四面に増やされ、朝夕発刊されるようになる。その当時の編集局長は廉想渉（ヨムサンソプ）、政治経済部長は洪陽明（ホンヤンミョン）、社会部長は朴八陽（パクパルヤン）といずれも朝鮮人が務めていた。廉想渉や朴八陽は当時、朝鮮ではすでに名の知れた文学者であり、言論家でもあったので、日本の要請によって、満鮮日報社の社員として新聞の編集に携わるように朝鮮から招かれたものと考えられる。尹東燦がその点についてすでに言及しているので、その該当箇所を以下に引用する。

『満蒙日報』を『満鮮日報』に改称する際、当社は朝鮮国内から責任者や記者に文学者を多く登用し、新聞の体質を変えようと努めた。その頃から朝鮮国内の既成作家たちは「文化部隊」として本格的に入満しはじめた。崔南善、廉想渉、朴八陽などの人々がそれである。そして朝鮮国内で活躍していた安寿吉のような作家たちも同社に籍をおくようになる。これらの作家たちが『満鮮日報』を舞台に作品を発表することによって、さらに朝鮮国内及び満洲国内の作家、あるいはまだ作家ともいえない文学青年たちを呼び集め、在満朝鮮人文壇を作り上げた。この時期『満鮮日報』の周辺で活躍した作家は数十人といわれているが、その多くは朝鮮から移動してきた既成作家たちだった。（中略）満洲国は「五族協和」の多民族国家である以上、朝鮮語による文学を完全に抹殺するわけにはいかない側面を持っていた。という意味からすれば、朝鮮人文学者にとって満洲は確かに「楽土」であったかもしれない。かかる事情により、満洲における朝鮮語文学の最盛期は三九年以降となった。当然、満洲国でも四一年に入って「芸文指導要綱」を発表するなど、政府の文化統制が本格化していくが、朝鮮文字の使用が禁止された朝鮮国内よりはまだましであったわけだ。とはいっても、在満朝鮮人文学に与えられた「自由」はかなり限られたものでしかなかった。(16)

一九三〇年代から四〇年代はじめにかけて、多くの朝鮮人が「満洲」に移り住んだため、「満洲」における朝鮮人の人口も年々増加し続け、日本としても疎かにできない規模に至った。よってそのような朝鮮人も「満洲国」の一民族として統治し、思想や言論を監督していく必要が生じたのである。当時新京では、在満朝鮮人に娯楽を提供するため、音楽会や演劇公演が度々催されていた。『満鮮日報』が朝鮮人読者のために唯一の朝鮮語新聞として残されたことや、新聞における文芸欄が非常に多彩で充実していたことを考えると、それもまた音楽会や演劇公演の開催と同様の目的をもって、日本政府に仕組まれたものであったと考えられる。

『満鮮日報』の紙面構成を見ると、朝夕ともに一、二面は政治に関する報道記事が主で、三面は地域のニュースや告知、そして四面が文芸欄となっている。『満鮮日報』の文芸欄は割かれている紙面の割合が大きく、小説や詩、童謡、散文、随想など多彩な項目でその紙面が彩られていたことから、朝鮮人文学者や『満鮮日報』の読者にとって重要な役割を果たしていたことが推測できる。日本の立場からすれば、『満鮮日報』の文芸欄は朝鮮人の生活の細部を知り、その思想や行動を監視するだけでなく、日本にとって好ましいように教え導くためにも重要な役割を果たしていたと思われる。呉養鎬（オヤンホ）も「文芸欄が文学作品で占められるのは当然ではないかと思うかも知れないが、その時期の本国のどこにもそのような現象は見られなかった。そして文芸面が音楽、美術、舞踊など他の芸術ジャンルと関連する紙面であると考えた場合、文学に対するこのような現象は当時満鮮社会において、芸術としての文学がどれほど大きな比重を占めていたかを物語っている。」[17]と述べている。新言論統制が大変厳しい朝鮮国内に比べて、「満洲」は「五族協和」というスローガンを掲げている以上、朝鮮のように厳しく取り締まりにくいという事情があったことはこれまでも度々言及されてきたことである。それに加えて、日本政府にとってみれば朝鮮民衆に娯楽的な要素も提供しながら日本にとって好ましい方向へ教え導く必要があったため、『満鮮日報』における言論統制は朝鮮国内に比べて穏やかであらざるを得なかったのではないかと考えられる。このように両面的な性格を持つ『満鮮日報』は、「満洲国」唯一の朝鮮語新聞であっただけでなく、一九四〇年に朝鮮の二大新聞であった『朝鮮日報』と『東亜日報』が次々と日本によって強制的に廃刊に追い込まれてからも、朝鮮の『毎日申報』とともに満鮮地域でたった二つの朝鮮語新聞のうちの一つとして存続していったのである。「満洲弘報協会」によって作られた言論統制システムの中で許された自由ではあるが、その自由を求めて朝鮮国内から多くの文学者が「満洲」に集まり文学活動を続けていたことは、それほど日本の植民地支配が朝鮮の人々の生活や文化、言論活動にまで広く及び、表現の自由を抑圧していたことを物語っている。そのように朝鮮から満洲へと逃れてきた朝鮮人文学者が『満鮮日報』の主筆や編集局長、顧問、記者として起用され、彼らが中心となって新

聞の編集や監督を行うようなシステムが文学者たちに比較的自由な言論空間を提供し得たのではないだろうか。またそうであったからこそ、限定的な自由しか与えられなかった文学発表の場でありながら、奇抜な表現で、なおかつ、反体制的な内容をも含んでいるモダニズム詩が文芸欄に登場し得たのだろう。

三、『満鮮日報』の文芸欄におけるモダニズム詩

『満鮮日報』文芸欄におけるモダニズム詩の中でも特に自らを「『詩現実』同人」と称した詩人たちの詩が広く知られており、先行研究でもよく取り上げられてきた。ここでは、一九四〇年八月二三日から同年八月二九日まで「『詩現実』同人集」という名前で載せられた詩六編[18]のうち、李琇馨（イスヒョン）が創作に関わっている詩二編を取り上げる。

生活の市街[19]

夜の皮膚の中には夜光虫の神話が咲く
夜の皮膚の中で銀河が発狂する
発狂する銀河には白装甲の朝の呼吸が乱舞する
時間なき時計は全ての現象の生殖街を見物する
それゆえに
白装甲の額には毒蝶がとどまって
永遠の午前を遊戯する
遊戯の遊戯は
花粉の倫理でもない
白昼の太陽でもない
真っ黒な、真っ白なそれでもない
真空の液体であったが液体でもなかった
さあそれでは出発しよう
許可された現実の真空の内蔵から
真っ黒なそして真っ白なそれでもない
聖母マリアの微笑の市場へ行こう
聖母マリアの市場には
白装甲の秩序が市街で羽ばたくだけであった

一九四〇　八　二〇　於図們

娼婦の命令的海洋図[20]

一万系列の歯科術時代は夜の海洋で島のハーモニカを吹く
一万系列の化粧術時代は空港の層階にて赤いチューリップの日暮れをシンフォニーする　記念日　記念日のチューリップは送葬曲に咲く紙花だった
明日の指を算術するチューリップは遠いプディスコの前で昇る　昇るシャボン玉の夜会服　記念日　記念日の幸福を約束した肉体の女人が双頭の仮面を装飾する日　七色のシュミーズが孔雀の微笑みを浮かべ私の海洋の蜃気楼についてきた

記念日　記念日のあなたの装飾に
あなたのその洋蝋燭のように蒼白な顔のあなたのその海の
　ような神話を聞かせてくれる瞳に
私の椅子は溺流された
私の椅子は溺流されたし
しかし娼婦は泣いてばかりいた
肉体の女人は装飾の歴史が悲しかった
仮面の女史は生きていることが悲しかった　双頭の怪物は
　なぜ泣いたんだろうか？
明日をまた装飾しなければならない運命を
明日もその翌日もまたその翌日も　生きて行かなければな
　らないことを
女人よ仮面よ深夜の幼子よ
現実に規約された誠実よりも阿片よりも酒よりも夜の秘密
　よりもこの健康術を愛する

一九四〇春作　終わり

先に挙げた二つの詩を見てみると、どちらも独特な語彙の組み合わせと難解な表現が入り交じっていることが確認できる。この二編の詩で共通して描かれているのは、華やかな夜の光に装飾された市街とそこで娼婦が売春を行う様子である。

「生活の市街」ではまず、「夜の皮膚の中」には白装甲を取り巻く銀河があり、その銀河が「発狂」しているとある一方で、そこにはまた「夜光虫の神話が咲く」という。「装甲」という単語には鎧をつけて武装するという意味があることから、ここで白装甲を取り巻く銀河とは、軍人とそれを取り巻く組織の隠喩であると解釈できる。また「生活の市街」の終わりに登場する「聖母マリアの市場」とは、当時新京の街にはびこっていた性売買が行われるようなキャバレーやダンスホールなどの娯楽施設であろう。そうすると白装甲の額にとどまって「永遠の午前を遊戯する」毒蝶とは、そのようないかがわしい娯楽施設で働く娼婦のことを指しているということは容易に想像できる。しかし詩の内容によると、その空間はあくまで「許可された現実」であり、「白装甲の秩序」が羽ばたくというところから、そこでは娼婦を取り巻く夜の市街そのものが「白装甲」を着た男性、つまり日本の軍人たちの権力の下で作られ、掌握されているという事実が示唆されている。語り手は詩の前半においては、夜の街で娼婦と客の間で行われている全てのことを「見物」する第三者の視点で語っているが、詩の後半では「さあそれでは出発しよう（中略）聖母マリアの微笑の市場へ行こう」と言い、「白装甲の秩序が」はばたく市街に自らの意志をもって出かけて行こうとする。つまり娼婦たちが閉じ込められている「発狂する」銀河の中へ、「許可された現実」へ語り手自ら入っていこうとしているのである。この行為が何を意味しているのかは「娼婦の命令的海洋図」の内容と照らし合わせることで明らかになると思われる。

「娼婦の命令的海洋図」は「私」と娼婦のやりとりと娼婦を取り巻く厳しい現実をとおして、一見華やかに見える夜の歓楽

街の実体が浮かび上がるような内容の構成となっている。「娼婦の命令的海洋図」では後半に進むにつれて、娼婦が置かれている厳しい境遇が比較的わかりやすくはっきり描かれている反面、その冒頭は「生活の市街」同様、非常に曖昧でわかりにくい表現が連なっている。しかしその冒頭部分に注目すると、「歯科術時代」における「歯」とハーモニカの外見上の共通点がこの難解な詩の冒頭部を読み解く鍵になると考えられる。つまりどちらも横に伸びる線の上に小さい四角い物体（空間）が多く並んでいるような形状をしているが、これは当時満洲を横断して走っていた鉄道の線路の形と似ている。「満洲国経済建設綱要」[21]によると、日本政府は一九三三年時点において、鉄道建設事業の一〇年先までの目標を一万キロとし、この詩が読まれた一九四〇年頃にはまさしくその目標に向けて着実に既成鉄道の延長工事が行われていたので、「娼婦の命令的海洋図」の冒頭で二回も登場する「一万系列」という言葉は、「満洲国」の主要都市を結ぶ鉄道の長さを象徴する表現として読むことができるのである。また、日本が同時期に「満洲」において鉄道延長工事とともに膨大な金額を投じて力を入れていたのが満洲国政府庁舎の建設であったが、その政府庁舎が立ち並んでいる地図（資料【一】参照）も「歯」や「ハーモニカ」の形とよく似ている。そして「娼婦の命令的海洋図」の二行目にある「化粧」と「空港」という言葉も、当時「満洲」において交通の利便性をはかるために設けられた、近代的な空港の設備とそのために施された道の舗装作業を表しているようである。

鉄道の線路が「満洲」各地に向け年を重ねるごとに長く伸び、中国風の勾配屋根を持ち、どれも似通った見た目をした政府庁舎が順天通りに次々と建つ風景はまさしく日本の権力の象徴であり、帝国の文明や経済力を外に向けて示すものであっただろう。このように「娼婦の命令的海洋図」の冒頭からは日本の主権の下で国都・新京が近代的な街として建設され、変貌を遂げている様子を見出すことができるのである。しかし支配される側の朝鮮人にとって、新京が近代的な街として変貌していく光景は、日本の支配とその権力の誇示を目の前でまざまざと見せつけられることに他ならない。よって新京の市街地が華やかに装飾されればされるほど、そのめざましい変化を生み出す日本政府の権力と支配のもとで生きなければいけない被支配層としての自分の境遇を却って認識させられたことだろう。

「娼婦の命令的海洋図」でもう一つ注目すべきであるのは、「肉体の女人」、「仮面の女史」、「双頭の怪物」、「深夜の幼児」といったさまざまな言葉で表現される娼婦の存在である。それらの比喩表現はいずれも娼婦という職業の表と裏、彼女たちの見せかけの華やかさとそこに隠れて見えない「泣いてばかり」の悲しい人生という二面性を浮き彫りにする。つまり、娼婦は普段の幼い少女としての自分とは違う娼婦としての仮面をかぶって、これがいつ終わるかもわからず「明日もまたその翌日も」二重の生活をしていかなければならないのである。娼婦の生活に見られる矛盾と偽りは、そのまま彼女が夜になると身を置く市街の歓楽地、さらにそのような歓楽地を作り、幼い「双頭の

怪物」を生ませてしまった、支配者としての日本人や日本政府への批判へと結びつく。全く不自由な空間の中でそれでも幸せであるように偽らなければならないことを「娼婦の命令的海洋図」の終わりでは「健康術」と表現し、明日をまた無事に生き伸びる方法として「現実に規約された誠実」、「阿片」、「酒」、「夜の秘密」のどれにも勝る術だと皮肉っぽく言っている。しかし「娼婦の命令的海洋図」の語り手も「生活の市街」と同様に傍観者的な立場からただ娼婦のことを語るだけでなく、「聖母マリアの微笑の市場へ行こう」(「生活の市街」)と語りかけたり、「娼婦の命令的海洋図」では詩の六行目から一一行目にかけてあるように、娼婦と享楽にふけったりして、同じ空間を共有しているのである。つまり語り手は娼婦の「装飾された歴史」や「健康術」に同情し不憫に思いながらも、自分自身もまた娼婦と同じ空間に被支配民として生きる以上、娼婦のように仮面をかぶり、本音を偽って生きる方法を選ばざるを得ないことを、この二編の詩を通して訴えようとしていると考えられる。

四、まとめ

本論文ではまず、『満鮮日報』という新聞が「満洲国」において発刊された経緯、またその内部構造を見てきた。そして『満鮮日報』の文芸欄に継続的に掲載されていた朝鮮人によるモダニズム詩がどのようなものであったかを李琇馨の詩を中心に見るとともに、そこで語られた内容の意味を考察した。当時日本政府は、『満鮮日報』において、定期的に文学作品の懸賞募集を行い、それによると朝鮮人の実生活を忠実に反映させたリアリズム的な作品が応募者に要求されていたことが確認できる。しかしそのような日本側の要求の正反対をいくような、朝鮮人のモダニズム詩が実はその内容において、「満洲」の市街の一見華やかな社交界の暗部とそれが孕む矛盾を暴くような反体制的ともとらえられるメッセージを内包していることがわかった。華やかな夜の市街が抱える矛盾やそこで生きる娼婦の悲しさを描くことは、当然その空間を含む「満洲」を「王道楽土」という標語のもとで支配し、統治していた日本政府にとっては都合が悪く、厳しく統制され禁止されるべきものであったはずである。その点こそが朝鮮人詩人たちがモダニズム的な手法を凝らし、難解な比喩表現を多用しながらそのような詩を当時盛んに書いた理由ではないだろうか。またそうして言論統制の監視網をかいくぐりながら日本による支配体制の矛盾を暴露したところにも、このようなモダニズム詩の価値を見いだせるのではと考えている。

※本稿においては、資料を引用する際、漢字の旧字体は新字体に改めた。ただし、人名の旧字体はそのまま掲載した。

【注記】

1　오양호は《『韓国文学과 間島』문예출판사、서울、1988.ㅍ》(呉養鎬『韓国文学と間島』文芸出版社、ソウル、一九八八年四月)において、「満洲」

で文学活動をしていた朝鮮人作家たちの文学作品を「移民文学」と名づけ、安壽吉や朴啓周、金東煥などの代表的作家について論じるとともに、第三章において『在満朝鮮詩人集』を資料として掲載している。

2 오양호は《『日帝強占期 満洲朝鮮人文学研究』문예출판사、서울、1996.1.》(呉養鎬『日帝強占期 満洲朝鮮人文学研究』文芸出版社、ソウル、一九九六年一月)において、『満鮮日報』における「詩現実」同人達の詩作品について詳しく論じるとともに、その他の詩についても特性ごとに分類し、そこから『満鮮日報』文芸欄の全体的な特質を述べ、評価している。

3 최훈は《『日帝強占期 在満韓国文学研究』깊은샘、서울、1990.11.》(崔壎『日帝強占期 在満韓国文学研究』キプンセム、ソウル、一九九〇年一一月)において、「満洲」で文学活動をしていた朝鮮人作家とその作品を具体的に取り上げ、具体的に論じただけでなく、『満鮮日報』に載せられた懸賞募集や広告文案にも注目し、その掲載時期による内容の微妙な違いについて言及している。

4 김호웅は《『在満朝鮮人文学研究』국학자료원、서울、1998.5.》(金虎雄『在満朝鮮人文学研究』国学資料院、ソウル、一九九八年五月)において、『満鮮日報』における「詩現実」同人達の詩作品に対する言及や考察が部分的になされている。

5 김장선『만주문학연구』도서출판 역락、서울、2009.4.(金長善『満洲文学研究』図書出版 ヨクラク、ソウル、二〇〇九年四月)

6 장춘식は《『일제강점기 조선족 이민작가 연구』민족출판사、북경、2010.7.》(張春植『日帝強占期朝鮮族移民作家研究』民族出版社、北京、二〇一〇年七月)において、『満鮮日報』に掲載されている詩作品について概略的に言及するとともに、「詩現実」の同人の一人であった咸享朱についても詳しく論じている。

7 大村益夫・李相範 編『『満鮮日報』文学関係記事索引』早稲田大学語学教育研究所、一九九五年一一月

8 강대민、김명구、민경준、김용희、정연진、황묘희『만선일보 조선인 단체·개인 관련 기사목록집』경인문화사、서울、2013.4.(カン・デミン、キムミョング、ミンキョンジュン、キムヨンヒ、ジョンヨンジン、ファン・ミョヒ『満鮮日報 朝鮮人団体個人 関連記事目録集』キョンイン文化社、ソウル、二〇一三年四月)

9 前掲注5に同じ。引用箇所は拙訳。

10 前掲注2に同じ。引用箇所は拙訳。

11 前掲注4に同じ。引用箇所は拙訳。

12 発刊地は龍井、一九二〇年頃発刊

13 大規模な新聞統合が行われる以前に約六〇新聞社、一〇〇紙存在した「満洲」のメディアは、一九四〇年九月までに、およそ一八新聞社、二九紙(邦字紙一一、華字紙一五、諺字紙一、英字紙一、露字紙一)にまで整理された。この一八新聞社は満州弘報協会へ加盟した新聞社であった。(里見脩『新聞統合 戦時期におけるメディアと国家』頸草書房、二〇一一年一二月)参照

14 里見脩『新聞統合 戦時期におけるメディアと国家』頸草書房、二〇一一年一二月

15 前掲注4に同じ。

16 尹東燦「「満洲」文学の展開」『「満洲」文学の研究』明石書店、二〇一〇年六月

17 前掲注2に同じ。引用箇所は拙訳。

18 『満鮮日報』掲載された、「『詩現実』同人集」（1）～（完）までの詩人とその詩作品を並べると以下の通りである。

『詩現実』同人集（1）李琇馨・申東哲合作「生活의 市街」（一九四〇年八月二三日）

『詩現実』同人集（2）金北原「椅子」（一九四〇年八月二四日）

『詩現実』同人集（3）姜旭「楽譜를 가젓다」（一九四〇年八月二五日）

『詩現実』同人集（4）李琇馨「娼婦의 命令的海洋図」（一九四〇年八月二七日）

『詩現実』同人集（5）金北原「비둘기날으다」（一九四〇年八月二八日）

『詩現実』同人集（完）申東哲「늣금과 飛行機」（一九四〇年八月二九日）

19 李琇馨、申東哲 合作 「『詩現実』同人集（1）生活の市街」『満鮮日報』一九四〇年八月二三日、拙訳。以下に『満鮮日報』掲載されていた詩「生活の市街」を韓国語のまま掲載する。

『詩現実』同人集（1）

生活의 市街

李琇馨
申東哲 合作

밤의 피부 속에는 夜光蟲의 神話가 피어난다
밤의 피부속에서 銀河가 発狂한다
発狂하는 銀河엔 白装甲의 아츰의 呼吸이 乱舞한다
時間업는 時計는 모-든 現象의 生殖街을 구경한다
그럼으로
白装甲의 이마에는 毒나비가 안자
永遠한 午前을 遊戯한다
遊戯의 遊戯는
花粉의 倫理도 아닌
白昼의 太陽도 아닌
시커먼 새하얀 그것도 아닌
真空의 液体 엿으나 液体도 아니엿다
자- 그러면 出発하자
許可된 現実의 真空의 内蔵에서
시커먼 그리고 새하얀 그것도아닌
聖母마리아의 微笑의 市場으로 가자
聖母마리아의 市場엔
白装甲의 秩序가 市街에서 퍼덕일뿐이엿다

20 李琇馨「『詩現実』同人集（4）娼婦の命令的海洋図」『満鮮日報』一九四〇年八月二七日、拙訳。以下『満鮮日報』に掲載されていた詩「娼婦の命令的海洋図」を韓国語のまま掲載する。

『詩現実』同人集（4）

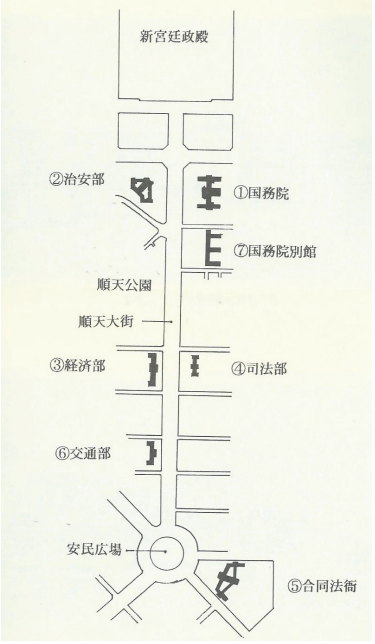
娼婦의·命令·的海洋図

李琇馨

一万系列의 歯科術時代는 밤의 海洋에서 섬의 하-모니카를분다
一万系列의 化粧術時代는 空港의 層階에서 뿔근 추-립푸의 저녁
을심포니한다 記念日 記念日의츄-립푸는 送葬曲에핀紙花엿다
明日의 손꾸락을算術하는 츈-립푸는머-ㄴ 푸디스코 압페

떠오르는 떠오르는비누방울의夜会服 記念日記念日의 幸福을 約束
한 肉体의女人이 双頭의 仮面을장식하는날 七色의 슈미-즈가
孔雀의 미소를띄워나의 海洋의 蜃気楼를따라왓다
記念日 記念日의 너의장식에
너의그洋조와 갓튼 蒼白한 얼골에너의 그바다와가튼 神話를들여
주는 눈동자에
나의 椅子는 溺流되엿다
나의 椅子는 溺流되엿다
그러나 娼婦는 울고만잇엇다
肉体의 女人은 장식의 歴史가슬펏다
仮面의 女史는 살아잇는것이 슬펏다双頭의 怪物은 왜울엇을까?
明日을 또장식하여야 할 運命을
明日도 그다음날도 그다음날도 살아야할것을
女人아 仮面아 深夜의 어린애야
現実에 規約된 誠実보담도 阿片보담도술보담도밤秘密보담도외健
康術을 사랑한다

21 国務院総務庁『満洲国政府公報』号外、一九三三年三月
資料【一】新京・順天大街の満洲国政府庁舎の位置と建設順序（国務院総務庁『満洲国政府公報』号外、一九三三年三月）



（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）